

バードリサーチ ニュース

2007年10月号 Vol.4 No.10

Phasianus colchicus
Photo by Watanabe Yoshiro

参加型調査

サシバの生息状況アンケートにご協力ください!

植田 睦之

1. 東京で見られたサシバの減少の原因

2006年12月に環境省から発表されたレッドリストでは個体数の減少を受けて、サシバが絶滅危惧種となりました。ぼくは以前、東京のサシバの生息状況の変化を解析したのですが(Uetaほか 2006)、東京では1970年代には28の1kmメッシュでサシバが観察されたのに対し、1990年代に観察されたメッシュは0で、アンケート調査で2メッシュの情報が寄せられただけでした。地理情報システムを使った解析の結果、東京でサシバが減少した最大の原因は谷戸田が住宅地等になってしまったことだということがわかりました。ここまで急激ではないものの全国でもサシバが減少していますが、その原因は何なのでしょう?耕作放棄や捕食者の増加など他の原因が考えられそうですが今のところはわかりません。

2. サシバの生息状況アンケート調査

そこで、サシバの現状とその減少の原因を明らかにするためのアンケート調査をすることになりました。1998年にもサシバのアンケートを行なっているので、それと比較することで、サシバの現状と今後の保護を考えるための資料としたいと考えています。日本野鳥の会、日本オオタカネットワークと岩手大学が合同で行なうこのアンケート調査に、

バードリサーチも協力しています。バードリサーチのホームページ(<http://www.bird-research.jp/sashiba/>)から情報の送信と以前のアンケート調査の結果を見ることができますので、ぜひアクセスしてください。

3. イギリス流草地性鳥類の回復方法

イギリスでも農業生産を効率化するための大区画化、秋撒き小麦への転換などで農地に生息する鳥たちが半減してしまいました。その保護のために、農地内に裸地をつくる試みがはじまっています。このような簡単な取り組みにより、農業の手法を変えることなく、鳥の生息地としての価値をあげることに成功しています(BTO 2007)。

サシバについてはこんな簡単なことでは回復させることはできないと思いますが、アンケート調査から何らかのヒントが生まれれば良いかと期待しています。アンケートへのご協力、ぜひお願いいたします。

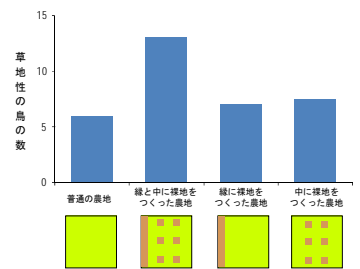


図. 農地に裸地をつくることによる草地性の鳥の種数の変化。農地内に裸地をつくる試みがはじまっています。

■引用文献

- British Trust for Ornithology. 2007. Creating fields of plenty. BTO News (271): 14-15.
- Ueta, M., Kurosawa, R. & Matsuno, H. 2006. Habitat loss and the decline of Grey-faced Buzzards (*Buteo indicus*) in Tokyo, Japan. Journal of Raptor Research 40: 52-56.

会員情報

バードリサーチカレンダーを作成します!

「いつもお世話になっております。今年もよろしくお願いたします。」のご挨拶のお供に、来年のカレンダーをバードリサーチで作成することにしました。このカレンダーは、会員の方限定で、事前申し込みに限り実費でお配りします。カレンダー自体が1部600円程度になる予定なので、価格はこれに送料を加えた金額になります。

カレンダーを希望される方は、10月31日までにお名前と送付先住所、希望部数をバードリサーチインフォメーション(br@bird-research.jp)までメールでお申し込みください。

ハガキサイズの卓上カレンダーで、表紙を除いて12枚、図のようなデザインで考えています。写真は会員の渡辺美郎さんに提供していただきます。



図. 卓上カレンダーの1月号のデザイン。

使用する写真はホームページ(http://www.bird-research.jp/1_shiryu/calendar.html)に掲載してあります。ご覧ください。【高木憲太郎】

参加型調査

モニタリングサイト1000とは？ ～ガンカモ類調査ボランティア募集！～ 神山和夫 バードリサーチ嘱託研究員

1. モニタリングサイト1000とは

重要生態系監視地域モニタリング推進事業(通称, モニタリングサイト1000; 以下, モニ1000)は環境省が2003年度にスタートさせた調査で, 全国に約1000か所の調査地(定点サイト)を設定し, 長期的な生態系の変化をモニタリングしているというものです。モニ1000のサイトは生態系タイプと地理的区分を考慮して図のように設定されています。



図. モニタリングサイトの分布図.

環境省の全国調査には「緑の国勢調査」と呼ばれている自然環境保全基礎調査がありますが, こちらのほうは動植物の分布を調べることが目的でした。この緑の国勢調査に加えて, 同じサイトで継続的に生態系の年変化を調べるモニ1000が始まったことで, より多角的な自然環境の把握が可能になりました。

モニ1000の特徴の1つに, 同じ定点サイトで生態系の変化を把握するため, 複数の分類群の生物の調査をすることがあげられます。すべてのサイトで複数の分類群の調査が行われるわけではありませんが, 例えば, 森林サイトの中には鳥類, 植生, 昆虫の調査が行われている場所があります。このようなサイトでは, 例えば鳥類の個体数や種構成の変化が起きた場合に, 植生や昆虫の変化と比較して, その原因を分析できることが可能です。

モニ1000では様々な生物群を調査しますが, 鳥類については表にあるような4種類の調査が行われています。バードリサーチでは, 以前から陸生鳥類調査のデータ集計や分析に協力したり, シギ・チドリ類調査のためにWebデータベースの提供を行ってきました。そして, 今年度からはガンカモ類調査の事務局を務めることになりました。

表. モニ1000の鳥類調査一覧(2007年3月末現在).

	サイト数	事務局	調査方法
陸生鳥類調査 (森林・草原)	421	日本野鳥の会	繁殖期と越冬期にラインセンサス
シギ・チドリ類調査 (干潟)	118	WWFジャパン	春秋冬にカウント調査
ガンカモ類調査 (湖沼)	80	バードリサーチ	越冬期と渡り時期にカウント調査
海鳥調査 (島嶼)	29	山階鳥類研究所	繁殖コロニーでのカウント等

2. ガンカモ類調査の目的とデータ利用

モニ1000のガンカモ類調査では, ガンカモ類の長期モニタリングを通して, 湖沼等の陸水域生態系の異変をいち早く捉えることを目的としています。

また, これまでこのような全国調査では集まった調査データを公開して利用してもらうことが難しく, 調査成果の活用が進まないことが課題になっていましたが, モニ1000ではデータの迅速な公開と活用の推進がテーマのひとつに据えられています。そこでデータの利活用推進のための第一段階として, シギ・チドリ類調査では今年からバードリサーチが提供するWebデータベースを使って調査員全員がデータの入力と検索を行えるような仕組みができています。

データ公開にあたっては, サイトや種の保全に不利益な目的でデータが利用されないように注意が必要なので, 現在のところシギ・チドリ類調査では調査員のみでデータの共有をしています。しかし, 今後は調査員の代表者などで構成される検討会でデータの利用ルールを定め, 生態研究や保全対策のためにデータを活用できるような環境を整えていきたいと考えています。ガンカモ類調査でもシギ・チドリ類調査と同様のデータベースを用いる予定なので, 同じようにデータ活用の促進を図って行きたいと考えています。



写真1. 北海道のサロベツのガンカモ類調査のサイト. 写真に写っているのはオオヒシクイ。

3. ボランティアサイトを募集します！

ガンカモ類調査では全国の主要な中継地と越冬地をカバーしています。しかし, 特にカモ類は以前ほど特定の場所に集中しなくなってきているので, カバーしていない中小規模のサイトの重要性が高くなってきています。とりわけ西日本には中小規模のサイトが多いのですが, モニ1000で調査しているサイト数は多くありません。

そこで, このような中小規模のサイトの情報を集めたいと考え, 調査してくれる方を募集します。調査の謝礼はご用意できずボランティア参加になりますが, 参加方法は, 日ごろガンカモ類を観察している場所で個体数をカウントした結果をお送りいただくだけで簡単です。参加していただいた方には, 全国のサイトの結果を集計し, ご報告します。

詳しくは, バードリサーチのガンカモ類調査のWebサイト (http://www.bird-research.jp/1_katsudo/moni1000/gankamo) をご覧ください。



写真2. 網走市湊沸湖のサイトで求愛するホオジロガモ。

4. 参考ホームページ

環境省のモニタリングサイト1000のWebサイト
<http://www.biodic.go.jp/moni1000/>

参加型調査

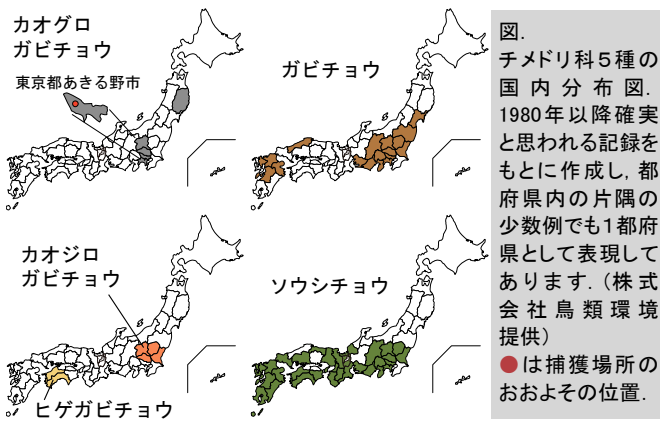
カオグログビチョウにカラーリング 目撃情報をお寄せください！ 片岡宣彦 ガビチョウ類研究グループ

1. 特定外来生物 ガビチョウとソウシチョウ

現在日本で見られるチメドリ科の鳥は、ガビチョウ属に含まれるガビチョウ、カオグログビチョウ、カオジログビチョウ、ヒゲガビチョウと、ソウシチョウ属に含まれるソウシチョウを合わせて5種にのぼり、このうちヒゲガビチョウを除く4種が特定外来生物として指定されています。

ガビチョウ属の鳥はヒマラヤや中国南部を中心に東アジアに54種が、ソウシチョウ属の鳥はヒマラヤから中国南部にかけて2種がいるとされていますが、いずれも本来日本には分布していませんでした。例えば、カオグログビチョウはもともと中国中南部からベトナム北部にかけて分布していた鳥です。どの種も飼い鳥として輸入されたものが逃げたり放されたりして、日本に定着したと考えられています。

これらの鳥たちはいつ頃から日本で見られるようになったのでしょうか？ガビチョウ、カオグログビチョウ、ソウシチョウの3種は1980年代前半から観察されるようになり、少し遅れてカオジログビチョウとヒゲガビチョウが1990年代中頃から後半にかけて相次いで観察されるようになりました。観察されるようになった場所は種によってまちまちですが、いずれも繁殖が確認され定着するに至っています。現在の大まかな分布は図のようになっています。



2. カオグログビチョウの移動分散を調べる！

日本で繁殖しているチメドリ科の鳥たちのうち、平野部に生息しているのに詳しい生態が報告されていないのがカオグログビチョウです。この鳥が生態系や私たちの生活にどのような影響を与えるのかも分かっていません。分布は今後どんどん広がっていくのでしょうか？その時、在来の生物に何か影響は出るのでしょうか？農作物に被害を与えたりしないのでしょうか？知りたいことはたくさんあるのですが、私たちはまず、この鳥の移動や分散を調べてみることにしました。



写真1. カオグログビチョウ成鳥。明るとところにも出てきます。

調査は、カオグログビチョウを捕獲し、足にカラーリングをつけて、その後の移動を追跡するというものです。もっぱら地上を歩いたり、枝から枝に伝いながら移動するので、捕獲はかなり苦労しました。それでも、2007年9月に東京都のあきる野市秋留台公園の周辺にひろがる農耕地で、3羽のカオグログビチョウを捕獲することができました。いずれの個体も右足に金属リングが、そして左足にそれぞれ赤、白、緑のカラーリングが一つずつ付けています(写真2)。



写真2. 捕獲したカオグログビチョウ。

私たちが頑張って調査地に足を運ぼうと思いますが、彼らがどこか離れた場所へ移動してしまった場合、私たちだけで追いかけることはできません。カラーリングのついたカオグログビチョウを見つけたら、片岡までその情報をお寄せ下さい。よろしくお願いします。

3. カオグログビチョウの見つけ方

捕獲した場所は、まとまった農耕地が住宅地に取り囲まれるように残されています。カオグログビチョウは、こんもり茂った造園業者の植栽林やクリ林が点在するこのあたりの農耕地あるいは隣接する河川敷などに生息しています。

ガビチョウがやぶを好み、その姿がなかなか見つけられないのとは対照的に、カオグログビチョウは開けた耕作地や公園の遊歩道などにも採餌のために出てきます。とは言え休息の際は茂みの中に入ってしまうので、この鳥を見つけるには特徴的な大きな声を覚えておくといいいでしょう。「ピッビュー、ピッビュー」と、遠くまでよく通る声で5~6羽の群れで鳴き交わっています。鳴き声は、Webサイト(<http://www.torikan.co.jp/webgairaisyu/cont/>)で聞くことができます。鳴き声をたよりに近付くと、林伝いに移動しながら時おり地上に降りて採餌している群れに出会うことができます。大きさはヒヨドリとオナガの間くらいです。

4. カオグログビチョウをみつけたら！

足にカラーリングがついたカオグログビチョウを観察されましたら、以下の項目とともにぜひ御連絡下さい！「カラーリングは確認できなかったがカオグログビチョウを見ました」という情報も大歓迎です。

■カオグログビチョウの情報の送り先

〒669-2222 兵庫県篠山市味間南586-7
片岡宣彦 e-mail: pupipara@gmail.com

●教えていただきたい項目

1. 観察年月日と時刻
2. 観察場所: (住所と環境をできるだけ詳しく)
3. カラーリングの色と位置(左足, 右足):
(付いていなければ「なし」)
4. 観察状況: (周りに何羽かいたか, 何か食べていたか等)

オオジシギ 英:Latham's Snipe 学:Gallinago hardwickii

1. 分類と形態

分類: チドリ目 シギ科

全長: 28-33cm
 自然翼長: ♂148.7±3.55mm (n=40) ♀149.2±3.00mm (n=24)
 尾長: ♂67.5±3.34mm (n=40) ♀64.6±2.79mm (n=24)
 露出嘴峰長: ♂68.6±3.52mm (n=40) ♀72.8±2.75mm (n=24)
 ふ蹠長: ♂36.4±1.09mm (n=40) ♀38.3±2.27mm (n=24)
 体重: ♂171.35±33.98g (n=40) ♀186.17±38.68g (n=24)
 ※全長は桐原ほか2000、その他の測定値(平均±S.D.)はUra 2005による。

羽色:

雌雄同色。日本で見られるタシギ属5種の中ではもっとも淡色。眉班は黄白色で前方では太く後方で細く明瞭。黒い過眼線があり、眼下には眉班と同色の横斑がある。頭側線は黒褐色で、細かい褐色斑がある。肩羽は黒褐色で外縁は黄白色である。雨覆は他の4種より淡色の傾向がある。雨覆の暗色斑は、成鳥は横斑だが、幼鳥はU字斑。風切羽先端は、幼鳥には白縁があるが、成鳥ではほとんどなくなる。尾羽の先端は白縁ですがすぐに黒縁があり、根元は黒色、他は茶色だが、外側数枚は白と黒の斑で成る。腹部は白色。



写真1. オオジシギ。茨城県竜ヶ崎市。2007年7月撮影。 [Photo by 岸 久司]

鳴き声:

地鳴きはゲツ、またはズビー、ズビー。地面だけでなく、木の枝や電柱の上でもよく鳴いている。繁殖期のディスプレイフライトの時は、ジッジッジッジッジーと鳴きながら旋回し、ズビヤークズビヤークと鳴きながら急降下する。その際、ザザザザッと尾羽からと思われる音を発する。急降下から急上昇に入るときは、チリューチリューチリューと鳴く。

2. 分布と生息環境

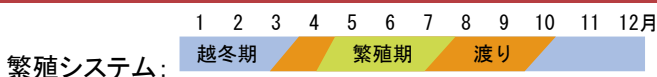
分布:

繁殖地は北海道とサハリン南部が主であり、本州および九州の一部の高原とアムール川河口域でも繁殖する。越冬期はオーストラリア東海岸一帯およびタスマニア島北部で過ごす。渡りの時期には全国で見られる。

生息環境:

繁殖期は主に、ヨシやスゲが生えているような乾いた草原、ササ原、牧草地や畑などの農耕地といった、平地や河川敷などの開けた環境に生息する。越冬期および渡りの時期は主に、湖沼岸や湿地で見られる。

3. 生活史



オスは子育てと食物資源の防衛をしないとされ、空中においてディスプレイフライトを伴う集団誇示を行うレック制で乱婚(中村・重盛 1995)。

巣:

草むら、草株や灌木などの根元の地上のくぼみなどに皿型の巣を作る。著者が発見した例では、スゲなどの下草を渦巻き型に押しつぶしたような巣を作っていた。巣の上には、蓋のようにして草が覆っていた。外径18cm、内径14cmで、深さは6cmであった。ディスプレイフライトが行われている場所から離れた湿原の縁に巣があるともされているが、この巣はディスプレイフライトが行われている場所のごく近くにあった。



写真2. オオジシギの巣と卵。

卵:

一腹卵数は一般に4個である。卵は灰褐色または灰白色の地に、暗褐色と薄紫褐色の小斑点が点在し、鈍端に斑点が密集する。著者の発見した巣の卵は、長径約3.7mm、短径約2.8mm、重量は19gであった。

ディスプレイフライト:

繁殖期のオオジシギのオスは、上空を旋回した後に尾羽を広げながら急降下し、その際に尾羽との空気抵抗によって音を発するディスプレイフライトを行う。場所や地域によっても違うが、ディスプレイフライトは4月5~20日の間には始まり、4月末~5月上旬にピークを迎え、5月下旬まで続く。その後は次第に減少し、7月上旬にはほとんどみられなくなる(新田・藤巻 1985, 中村・重盛 1995, 飯田 1991)。

著者が調べた北海道苫小牧の例では、5月上旬がピークで、6月下旬にはほとんどみられなくなった(図1)。ディスプレイフライトは、日の出の前と後、日の入りの前と後に、4つのピークの時間帯がある(図2)。

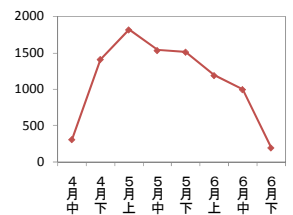


図1. 苫小牧でのオオジシギのディスプレイフライトの一日あたりの観察回数の季節変化。

渡り:

春の渡りについての情報は少ないが、越冬地のオーストラリアを2月末~3月はじめ頃に渡去する。秋の渡りは7月初めに始まり、8月15~20日頃にピークを迎える(大畑 1989)。9月上旬に2回目のピークがあり、その後は急激に減少し、9月中に終わる。

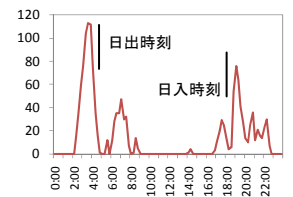


図3. 苫小牧での4月末のある一日におけるオオジシギのディスプレイフライトの15分ごとの回数。

4. 食性、採餌環境

ミズミズなどの環形動物、歩行性昆虫、クモ、軟体動物、等脚類やムカデ類といった土壌動物を捕食し、草の種子なども食べる。越冬地であるオーストラリアでの糞分析では、水生甲虫の成虫と幼虫、双翅目の成虫と幼虫、毛翅目の幼虫、ミズダニ類の成虫、草の種子などが食べられており(Todd 2000)、中でも水生甲虫の割合が最も多かった。

越冬地では昼も夜も採餌を行っているが、昼は干潟など

の開けた環境で多く、夜間は草本植物の茂みなどの縁の浅い水に覆われた泥地で多く採餌しており、やわらかい泥のある場所で採食成功率が高い(Todd 2000). なお、筆者が調査を行った苫小牧弁天沼の岸は、ヨシやヤチヤナギなどの群落が点在する泥地である。しかし、渡りの時期には、夜間は多くいても、昼間に見かけることはなかった。

5. 興味深い生態や行動、保護上の課題

● 性的二型

オオジシギではオスの方がメスよりも体サイズが小さいと言われている。また、よりアクロバティックなディスプレイフライトを行う種ほど、この傾向が強いという仮説がある(Figuerola 1999)。

筆者は体サイズの性差とディスプレイフライトの関係について詳しく調べるために、

成鳥64羽、幼鳥456羽を捕獲して、体重や体サイズを計測し、DNAから雌雄判別を行って性差を調べた。

その結果、計測値のいくつかで性差がみられた。年齢に関係なく露出嘴峰長とふ蹠長はメスで有意に大きく、尾羽長と外側尾羽長は、成鳥ではオスの方が有意に長い。幼鳥では性差がなかった。尾羽の枚数は、14、16、18枚のものがあった。そして、18枚の個体のほとんど(82.7%)オス、16枚の個体のほとんど(74.8%)がメス、14枚の個体のすべてがメスであることが分かった(Ura *et al.* 2005)。

オスの方が体が小さく、尾羽の枚数が多く、成鳥になるとメスよりも長くなるのは、ディスプレイフライトの際に空気抵抗が増えて音が大きくなる、空中での操作性が増すなどの理由によるのかもしれない。このように、オオジシギの性的二型はディスプレイフライトに特化し、メスをより強く惹きつけるために進化したものと考えられる。

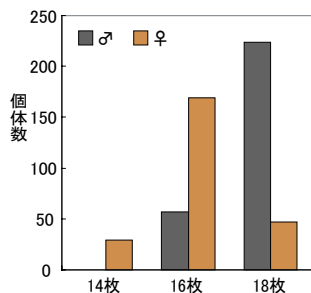


図2. 尾羽の枚数と雌雄の関係.



写真3. ディスプレイフライトをするオオジシギ.

● オオジシギの現状

オオジシギは、環境省のレッドリストでは準絶滅危惧種に指定されている。本州では以前から生息地や個体数の減少が指摘されており、北海道でも最近では個体数が減少してきていると言われている。越冬地であるオーストラリアでは、1970年代に生息数が減少し、1980年前後に狩猟対象種からはずされた。

栃木県内における2003年と2004年の調査では、1986年と比べて県内の全体的な生息地点数、生息個体数ともに著しく減少していた(平野ほか 2005)。これらは、生息環境自体の喪失が主な原因だと考えられているが、牧草地では環境が変化していないにもかかわらず、個体数が減少していた。北海道十勝管内においても、2001年の個体数は1978~1991年のそれと比べて減少していた。ここでも畑や

牧草地など農耕地では個体数が減少していたが、残存林を有する農耕地では減少していなかった。これは、残存林の林床にはオオジシギの営巣場所としてよく利用されるミヤコザサがあるからだと言われている(北島・藤巻 2003)。牧草地や畑などの農耕地があるだけでは、オオジシギにとって十分な生息環境とは言えないようである。筆者が以前調査していた苫小牧の勇弘原野でも、最近、ヨシ原だった場所が大規模に耕作地へと変化しており、調査したわけではないが、オオジシギの数が減っているように感じた。

オオジシギが好んで生息する平らで開けた環境は、工業や住宅の用地として開発される可能性が非常に高い場所である。そのため、本州のみならず主な繁殖地である北海道でも、気が付かないうちにオオジシギがいなくなっているということが起こるかもしれない。こういったことを防ぐには最低限、少なくとも北海道では定期的にオオジシギの繁殖地点、個体数および個体数の多い場所、推定個体数を把握しておき、今まで以上に減少傾向が生じた場合には、すぐに対応できるようにしておくことが重要である。

6. 引用・参考文献

- Figuerola, J. 1999. A comparative study on the evolution of reversed sexual size dimorphism in monogamous waders. *Biological Journal of the Linnean Society* 67:1-18.
- 平野敏明・君島昌夫・小堀政一郎・小堀脩男・野中純・志賀陽一. 2005. 栃木県におけるオオジシギの減少. *Strix* 23:31-38.
- 飯田知彦. 1991. オオジシギ *Gallinago hardwickii* の繁殖行動と生息環境. *Strix* 10:31-50.
- 桐原政志・山形則男・吉野俊幸. 2000. 日本の鳥550水辺の鳥. 文一総合出版, 東京.
- 北島幸恵・藤巻裕蔵. 2003. 北海道十勝平野におけるオオジシギ *Gallinago hardwickii* の生息数動向. *山階鳥類学雑誌* 35:12-18.
- 中村浩志・重盛究. 1990. オオジシギ *Gallinago hardwickii* の繁殖期における日周活動と社会構造. *山階鳥類研究所報告* 22:85-113.
- 新田和弘・藤巻裕蔵. 1985. 繁殖期におけるオオジシギの日周活動の季節変化. *鳥* 34:49-55.
- 大畑孝二. 1989. ウトナイ湖におけるオオジシギの秋の渡りについて. *Strix* 8:139-144.
- Todd K., M. 2000. Feeding ecology of Laham's Snipe *Gallinago hardwickii* in the Lower Hunter Valley. *Emu* 100:133-138.
- Ura, T., Azuma, N., Hayama, S. and Higashi, S. 2005. Sexual dimorphism of Latham's snipe (*Gallinago hardwickii*). *Emu* 105:259-262.

執筆者

浦達也 (財)日本野鳥の会 自然保護室

オオジシギの研究が縁で2年前から野鳥の会に勤めることとなり、こうやって野鳥の保護に係る仕事ができることになりました。オオジシギをはじめチュウヒやその他の草原性・湿



地性鳥類は、個体数減少の危機にさらされやすい鳥なので、これらの種や環境のモニタリング調査などに力を入れていければと考えています。仕事はデスクワークが多いのですが、いつでも野外調査に出られるよう、体は鍛え続けています。

参加型調査

ヒクイナの生息状況調査 速報とお願い

平野 敏明

昨年から行なっているヒクイナの生息調査について、9月20日までに届いた情報をもとに、2年間の調査結果を簡単にお知らせいたします。

この調査では、2006年と2007年の2年間で合計52名の方に参加していただきました。ご協力いただきました皆様には厚くお礼申し上げます。プレイバックを用いた現地調査とアンケートによる報告をまとめたところ、2府14県で繁殖期に生息が確認され、2006年の繁殖期は合計23か所で少なくとも35羽、2007年は合計27か所で少なくとも56羽のヒクイナの生息の記録が得られました。岡山県と山口県では繁

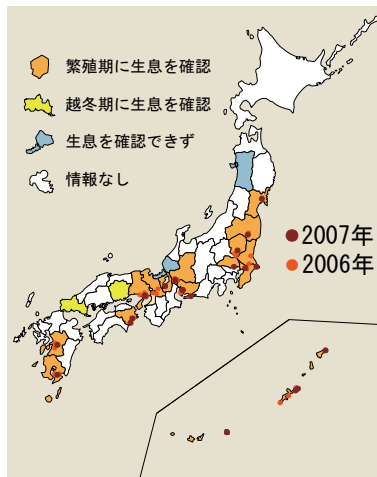


図1. 2006年と2007年に繁殖期におけるヒクイナの生息が確認された地点と都道府県ごとの生息確認状況。

殖期の記録は得られなかったのですが、越冬期にヒクイナが観察されました。

しかし、福井県では現地調査を実施していただいたにもかかわらず、生息を確認することができませんでした。秋田県はアンケート調査のみですが、今のところ生息を確認できていません。

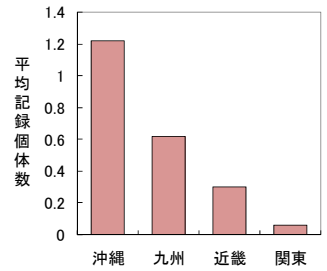


図2. 現地調査による地域別のヒクイナの平均記録個体数。

また、現地調査の結果をもとにしたプレイバック地点ごとの平均記録個体数(現地調査で得られた個体数を調査地点数で割った値)は、沖縄でより多く、北へ行くほど減少し、関東では他の地域と比較して著しく少ないことがわかりました(図2)。

2年間の調査で、だいぶヒクイナの生息状況がわかってきましたが、まだまだ情報のない都道府県が多く残されています。「早朝に河川や池、沼などの草原に出かけるが、ヒクイナをまったく観察しない」とか、「以前はよく見たが最近まったく見ない」などの不在データも重要な記録です。まだ間に合いますので、ヒクイナに関する情報をお持ちの方は下記のサイトのアンケート送信フォームから、お知らせください。特に空白の都道府県の皆さま、宜しくお願いいたします。

■ヒクイナ生息状況アンケートのページ

http://www.bird-research.jp/1_katsudo/index_hikuina_question.html

図書紹介

青森県のフィールドから 野外動物生態学への招待

佐原雄二編／弘前大学出版会 定価 500円(税別)

動物の本質は「食べること」。食べ物を手に入れるための日々の活動が、動物達の暮らしをどのように形作っているのか? 本書は、水辺の小さな魚の活動量の日周変化の研究に端を発した、佐原雄二さんと遠藤菜緒子さんの青森県のフィールドでの研究を読みやすくまとめた本です。

河口部でゴカイを食べるピリンゴは、満潮時刻になるとゴカイのとれない岸辺の浅場に移動します。捕食者であるヌマチチブを避けているのではないかと考えられます。また、そのヌマチチブは潮が引くと活動性が極端に低くなり礫の下などに隠れます。ヌマチチブは何を恐れて礫の下に隠

れるのでしょうか?最後の章は、「魚の研究から鳥の研究へ」つながっていきます。

この研究は、日周活動リズムがテーマなので、長い時には数日にわたって、まとまった睡眠がゆっくりとれない体力勝負の調査です。それでもとても楽しそう。謎解きの興奮と、研究対象への思いが伝わってきます。【加藤ななえ】



バードリサーチニュース 2007年10月号 Vol.4 No.10

2007年10月17日発行

発行元: 特定非営利活動法人 バードリサーチ

〒191-0032 東京都日野市三沢1-26-9 森美荘 II-202

TEL & FAX 042-594-7379

E-mail: br@bird-research.jp

URL: <http://www.bird-research.jp>

発行者: 植田睦之

編集者: 高木憲太郎